

# ゆさぶる静けさ

## 西川美和監督映画作品研究

著者：経済学部3年 村木美砂

指導教員：Michael Ainge

日本の著名な若手映画監督である西川美和の作品の分析を試みた。日本において映画研究は少なく、西川に関して実証的な分析がなされた論文はない。したがって本論文が監督の作品に取り組む初の論文となるであろう。

本稿では、Auteurism と呼ばれる監督中心主義との思想を軸に、Close Reading という作品それ自体から映画としての要素を詳細に読み解いていく手法を用いた。作品の背景の検証に注力する構造主義的な分析と比べ、より客観性が期待できる。分析する作品についてはオムニバス2作品を含む過去の6作品である。西川監督は全て脚本も手掛けているため、彼女が扱う「人間の本质」というテーマについて、映画的に表現として一貫しているかを検証した。Narrative（狭義の物語構造）、物語の進行、テーマ、演出やモチーフ、とりわけ特徴的な演出手法の5つの点から検証し、どれも映画監督としての力量を示していることを確認した。

西川はハリウッド映画等に見られる古典的な物語構造ともリアリズム的な物語構造とも異なる、起伏はあるが物語と視覚的な盛り上がりはずれを持たせた独特な Narrative を採用している。物語の進行は最近のものになるにつれ時系列が複雑になり、Narrative と合わせ、観客の展開の予想を阻害し作品に注意を惹きつけている。テーマは人間全般を描くものと女性に焦点を当てたものの2通りの系譜が見られ、社会的な問題も含みこんだ「人間の本质」を抉り出すテーマ設定が優れている。作品を越えて使用される演出やモチーフには、それぞれに監督の意向が提示されており、テーマの複雑性とは反対に、映画表現としての丁寧な構築、説明力が認められる。特に「360度ショット」と仮に名付けた、複数のショットによって場面を多角的に撮影する独自の演出法が注目できる。これによって単純で閉鎖的な空間においても不思議な迫力が生まれ、家屋では様々な部屋における多角的で彷徨う自己同一性が演出されている。

本研究で西川美和監督作品は、共通する「人間の本质」というテーマに対し、真相の否定を解として提示しているという結論を得た。人間性の多重性、多面性を物語構成や演出などから適切に表現し、絶対的な人間存在を棄却している。今回は監督ご自身のインタビューを取り付けるまでには至らなかったものの、今後も西川監督の活躍と発展を祈念し、研究を続けたい。